

知的障害教育福祉の文化を今後の福祉教育に繋ぐ -糸賀一雄生誕 100 年に向けて-

1. 研究目的

初代園長糸賀一雄を中心に、近江学園（現 滋賀県立近江学園）の実践を支えた人物の遺した史資料を整理保存し、これらの公開に向けた合意形成とスケジュールを確立して歴史研究に資することを目的とする。また、本学をはじめ広く福祉教育に資するテキストを編纂できる環境を構築することも念頭に置いている。

2014 年は糸賀一雄生誕 100 年を迎え、滋賀県、湖南省、鳥取県（生誕地）などにおいて記念行事等が開催された。

2. 研究組織

(所員)		
蒲生 俊宏	社会福祉学部	研究の総括・進行管理
佐竹 要平	通信教育科	史資料の確認
(外部)		
齋藤 昭	社会福祉法人大木会理事長	調査の進行管理
三浦 了	社会福祉法人大木会顧問	調査の立ち会いと助言
富永健太郎	田園調布学園大学専任講師	史資料の調査

3. 旧糸賀邸と「一碧文庫・不問庵」

旧糸賀邸は、糸賀一雄亡き後、滋賀県立近江学園や社会福祉法人大木会が現在地に移転するに当たり、妻である糸賀房氏によって建てられたものである。平成 25 年 9 月に同氏が亡くなり、糸賀家の意向により土地、建物、書庫内に遺されていた書籍・資料が社会福祉法人大木会に寄贈された。社会福祉法人大木会による「不問庵」及び「一碧文庫」（パンフレット・2014 年 10 月）には以下のようにある。

2010 年 8 月に、湖南省東寺地先の糸賀房様のご自宅と敷地を大木会に受贈しましてから、その活用についていろいろと検討して参りました。そして、昨年 9 月より改修及び新築の工事に着手し、このたび完成いたしました。

建物を「不問庵」及び「一碧文庫」と命名し、次のような多目的な利用を計画しています。

〈建物の概要〉

「不問庵」（ふもんあん・改修後の旧糸賀邸）

長年、糸賀房様の命名で、もみじあざみの茶室で使われていた名前です。当分は地域交流や研修の場に利用するほか、文庫の資料整理、調査研究の会議にも使用します。

「一碧文庫」（いっぺきぶんこ・新築した倉庫）

一碧は糸賀一雄氏の俳号。琵琶湖の一筋の碧い水とも。糸賀資料を初め、大木会が所蔵する数多くの貴重な資料保存のための文書庫で、資料整理や資料の展示、閲覧等も行える施設ももっています。

本研究の期間は、これらの工期とも重なったため、書庫内の書籍・資料の一時保管場所への移動と竣工後の再移動といった作業にも携わることになった。

4. 研究調査の概要

4-1. 2013年度共同研究

①書庫内の資料は、段ボール箱 15 箱に遺されていた。まず、これらを 1 箱ごとに「文書箱（大型）」（アーカイバル仕様・注文品）に保存した。これらの中には、書簡類のみの 2 箱（文書箱（以下「箱」）06.07）、ならびにヨーロッパ視察中（1960-1961）に収集、撮影されたと考えられる欧文資料（箱 10）とスライド（箱 11）とが含まれる。

また、これら以外に大・小の 2 脚の引出（近江学園木工科の製品）が設置されており、引出ごとに配列を確認しながら「アーカイバル封筒」（注文品）に封入した。

②書庫内の書籍については、配列を再現できるように記録し、63 箱の段ボール箱に収納した。

③上記のものを、工事の開始前に一時保管場所へと移動した（法人職員と合同）。

④竣工に合わせて、一時保管していた資料、書籍を「不問庵」に移動（法人職員と合同）、書籍については一冊ずつ取り出してクリーニング処理をした。

⑤三浦了氏（社会福祉法人大木会顧問）のスケジュールによっては、適時、書簡の確認、クリーニングを実施した。



4-2. 2014年度共同研究

⑥書籍については上記④のクリーニング処理を完了し、配列を確認しながら修復後の書庫に戻した。

⑦資料（文書箱 15 箱）については、「一碧文庫」の完成を待って保存庫（湿度管理あり）に収納した（法人職員）。

⑧ 4 月 11 日には不問庵・一碧文庫のお披露目の会が開催され、関係者が参会した。あらかじめ閲覧コーナーの準備（書籍や資料の紹介）を行い、当日は参会者の案内、説明に当たった。

⑨ 5 月からは箱 01 から順に資料の確認、クリーニング処理、保存の作業を開始した。箱 06.07 ならびに箱 10.11 を除いて、この作業は 11 月まで継続し、完了した。

⑩この間、上記⑤の作業に加え、糸賀一雄著作集、岡崎英彦著作集の書庫搬入（点検、クリーニング）、糸賀一雄の講義ノートやスケジュール手帳の確認なども実施した。

⑪ 10 月からは書庫に設置されていた引出の資料の確認、クリーニング処理、保存の作業を開始し、2 月には完了した。



⑫ 9月には齋藤理事長らの調整、紹介により社会福祉法人しがらき会を訪問し、「池田太郎記念資料館（故 池田太郎氏が遺された資料・書籍、アルバムなど）」（信楽青年寮敷地内）の資料整理、保存作業について説明し、了解を得た。12月には同資料館の概要を把握し、3月から具体的な作業を開始した。



5. 糸賀一雄宛書簡確認作業の経過

糸賀一雄宛書簡の確認については、三浦氏の同席を基本に作業を進めた。2年間の作業を通じて確認できた書簡は2箱のうちの4分の1程度であり、今後も継続してゆくことになる。

これまでの作業からは、1960年代のものが多くことが予想される。内容については公文書から私信まで実に多様である。

作業が完了した後は、社会福祉法人大木会の確認を経て、プライバシー保護を大前提に公開に向けてのルールを検討したい。

6. 一碧文庫史料（旧糸賀邸書庫内資料）

旧糸賀邸書庫内の11箱（書簡、欧文資料、スライドを除く）、ならびに引出に所蔵されていたファイル数は1110であった。ファイルの形態は、冊子、ノート、罫紙、封筒入り一式（会議や学会など）、枚数で数えられる紙媒体など多様である。古い録音テープや印鑑などの物品については、社会福祉法人大木会に確認の上で別箱に収めた。また、色鉛筆入りの錆びた缶のような他の史料にマイナスに影響を与える可能性が高いものについては廃棄した。

確認作業は文書箱01から文書箱15の順、その後に引出の内容物について実施した。整理番号は基本が6桁（〇〇（大分類：箱、引出）〇〇〇（中分類：史料の原型の並び順））であるが、封筒入り一式の場合等で必要な場合には2桁の小分類番号を付した。大分類については下記のように配列されている。大分類20は旧糸賀邸に所蔵されていた史料であり、糸賀一雄著作集の刊行作業などの都合で社会福祉法人大木会の会議室等に保管されていたものである。

大分類	文書箱・引出	12	文書箱 12
01	文書箱 01	13	文書箱 13
02	文書箱 02	14	文書箱 14
03	文書箱 03	15	文書箱 15
04	文書箱 04	20	大木会経由史料
05	文書箱 05	21	引出（大）左列
08	文書箱 08	22	引出（小）
09	文書箱 09	23	引出（大）右列

リストは、まず、史料の発行年が確定されたものを発行年の古い順に整理した。次に、発行年が未確定あるいは不明のものについて大分類順に整理した。また、例えば石田博英、三木安正、田中昌人などの斯界において広く知られている人物については、内容を勘案した上で氏名を記載してある。一方、これら以外の人物、組織などについては、一部あるいは全部を匿名化して記載した。

未確認・不明の391ファイルの中には明らかにフォロー可能なものも含まれており、この作業は今後の課題である。1950年代前半までのファイルは57に過ぎず、発行年が確定されたもの全体の約8%である。ファイル数のピークは1963年から1967年の5年間で、399ファイル（約55%）であった。1968年9月18日に糸賀は死去していることから、同年以降のファイルは没後のものが含まれている。

1945年までのファイル数は12で、この内5は糸賀のスケジュール手帳である。これらは引出に収納されていたもので、判読不可能な走り書きの内容が多い。1946年11月15日の近江学園開園まもなくのファイルには、「オタンジヨウカイ」「クリスマス祝会」「ひな祭りプログラム」などの行事に向けて手作りされたものが目立つ。逆に考えれば、創設期の近江学園の史料は、ほとんど見当たらないと言える。1951年のファイルには、糸賀が初めて非常勤講師として教壇に立った彦根短期大学保母養成所での講義ノートが確認できる。

一方、ファイル数が最も多い 1966 年の史料を概観すると、学園 17 ファイル、団体 13、自治体 12、雑誌 7、名簿 4、厚生省 13、審議会 7 などであり、同年の糸賀の多忙な活動を雄弁に物語っていると考えられる。

一碧文庫の文書箱所蔵ファイルの属性別分類を試みると、「学園」には、近江学園を初め、日向弘済学園や大木会など近江学園から派生した施設や法人を含めている。「団体」は学会、研究会、育成会などの関連団体である。「自治体」はファイル数の多い順に、大阪府、滋賀県、富山県、北海道、愛知県、長野県などとなっている。これらの内容を概観すると、「コロニー」建設に関するものが多い。「厚生省」と「審議会」については、例えば「国立コロニー」設置に関するファイルなど、いずれに分類すべきか迷うものもあったが、史料に付されているタイトルを優先した。

以上を総括的に考え合わせると、一碧文庫史料（旧糸賀邸書庫内に遺されていた資料）は、糸賀の晩年に相当する時期のものが多く、滋賀県立近江学園や社会福祉法人大木会などが南郷から現在地に移転した 1969 年から 1971 年の経過の中で、南郷の糸賀園長舎から移動してきたものの一部であろうと推察される。南郷の園長室などに所蔵されていたであろう公文書や諸記録類については、一碧文庫史料の中にほとんど見当たらない。

7. まとめと今後の課題

2013 年度の研究スケジュールでは、同年度内に糸賀一雄関係史資料の作業を終了する予定であった。しかしながら、結果的に 1110 のファイル数になったように、膨大な史資料の確認等に予想以上のエネルギーを費やさざるを得なかった。また、既述のように社会福祉法人大木会による旧糸賀邸の改修、新築工事とも重なった。よって、当初予定していた池田太郎、田村一二関係史資料の作業について、前者については作業を開始した段階、後者については今後に残された課題という状況である。

一碧文庫・不問庵についても既述の通りだが、齋藤理事長を初め社会福祉法人大木会の史資料への姿勢を反映するものであり、歴史研究者あるいは国民の一人として、その英断に心より感謝申し上げたい。これまで多くの知的障害関係施設での史資料作業に携わってきたが、一碧文庫ほどに設計段階から史資料の保存を第一に考え、作業の便宜にも十分な配慮がなされている建物はなかった。思い返せば、2002 年度に初めて三浦理事長（当時：現顧問）を社会福祉法人大木会に訪ね、史資料整理についての無理なお願いをさせていただいてから 12 年が経過する。齋藤理事長のご配慮により、今年度からは社会福祉法人大木会の評議員として更なる関係を持たせていただくことにもなった。

一碧文庫史料について、公開、共同利用を目指していくことは社会福祉法人大木会の意向でもある。しかしながら、本報告で示したように、ようやくファイルごとの確認が出来た段階にある。史料へのアクセスについては社会福祉法人大木会の確認を条件とすること、史料を一碧文庫の外に持ち出さないことを大原則とすることは、これまでの作業においても例外なく遵守してきているところである。社会福祉法人の資産という性格上、当然のことながら一碧文庫に常駐の職員を配置する余裕はない。今後も、公開、共同利用の手続きをいかに具体化してゆくか、社会福祉法人大木会と検討を進めてゆく所存である。

2014 年度はサバティカル（長期研究出張）の適用を頂戴し、学校法人日本社会事業大学、日本社会事業大学社会事業研究所、大学の同僚や関係者には少なからざるご配慮を頂いた。記して、感謝申し上げたい。

2015 年 4 月

研究代表者 蒲生俊宏